

吹き鳴らされる笛、乱打される鉦や太鼓が、賑やかにそして華々しく拍子を刻む。そこに弦楽器の音色が重なり甘やかな歌声があいまって、豊作を神々に感謝するひとつの音楽に昇華していく。

音楽に合わせ、舞台の上に踊り子たちが駆け上がり、観客たちが歓声を上げた。

豊穰を祝う神への奉納舞。それが終われば、後は無礼講のドンチヤン騒ぎが待っている。

「すげえ人だな」

「あたりの人間が全部集まってきたんだろうな」

城壁に囲まれた巨大な都市。その町並みを埋め尽くすほどの人並みから逃れるように、高い建物の外階段に佇んでいた男たちが顔を見合わせる。厚手の外套と足元に投げ出された荷袋とで、彼らが旅人なのだということが知れる。

「どうするよこれ」

「時期が悪かったな」

二人は苦い顔をしてため息をついた。

「さっさと抜けるに限るな、こりや。買い物も宿も、どうにもならねえだろ」

「じゃあ行くか」

今この街は、すべてが祭りを中心に動いている。宿を求める人の数は普段と比較にならないし、商店の店先にも祭りの賑わいを当てにした品物ばかりが並んでいる。祭りを目当てにしないただの旅人

にとつては、無駄な労力と金銭とを割いてまで滞在する理由にはならないのだ。

あつさり話をまとめた二人は、それぞれ足元の荷物を取り上げた。

階段を降りきつたとたん出くわした途切れることのない人の流れにうんざりとした顔を隠そうともせず、まずは長髪の男が動く。

街の中心を目指しているのだろうか。人波に割り込んだ男は、その長身をもともせず器用に人の隙間を縫いながら流れに逆らって進んでいく。肩がぶつかつただの足を踏まれただのという小さないざこざがあちらこちらで散見するほどの場所であるのに、男は誰とぶつかることもなく歩いていく。必要最小限の動きで隙間を縫うその動きは、猫、否猫科の大型肉食獣を思わせた。

そして長髪の男の後ろを、少しばかり背の低い短髪の男が絶妙な間合いで追う。先導する男が横をすり抜けていく気配に顔を上げた人々は、目の前に迫るがっしりとした体格の男に気付き、慌てて道を譲るのだ。無言の威圧に驚いて足を止めてしまう者も少なくないというのに、こちらも肩をぶつけることなく身をかわし、すり抜けていく。やはりこの男も野生の獣のような身のこなしだ。

黒髪を尻尾のように翻し順調に進んでいた男がふと視線を上げた。するりと素早い動きで横に身をかわす。後に続く男も同様にして向きを変え、二人そろって民家の外壁に張り付くようにして足を止める。

二人が道を譲った直後、人波が悲鳴とともに割れた。

周囲を押しつけるようにして現れたのは、一目で武人と分かる男たちの集団だった。腰に刷いた帯剣を、手にした槍を、これ見よがしにかざしている。

「何だ、ありゃ」

人騒がせな集団に、二人は眉をしかめた。その表情には、慌てて道を明ける者たちのような恐れの色はない。さっさと逃げたのは、ただひたすらに面倒な関わり合いを避けるためだった。

「——と」

長身の男が左手を伸ばした。割れた人の流れから押し出されてきた初老の男を支えるためだった。

「おっちゃん大丈夫か？」

「お、おお、悪いな兄さん。助かったよ」

危うく壁に激突しかけた老人は、心持ち青ざめた顔にほっと安堵の色を浮かべた。

「おっちゃん、ありゃ、何だ？」

「あんた、旅人さんかい。じゃあ知らないだろうな。あの人たちとは広場でやる武闘大会の出場者だよ」

「武闘大会？ ああ、祭りの余興か」

「まあ農らにとつちや余興みたいなもんがな、あの人たちにとつちや真剣勝負だ。聞こえたらぶちのめされるぞ」

老人が声を潜めるようにして教えてくれる。

「真剣勝負う？ そういやピリピリしてつけど何かいいコトあんの？ ああ、勝ったら賞金が出るのか？」

「それもあるがなあ。あの人たちにとつて一番の魅力は、ここの領主様に高給で召抱えられることだろうよ」

「ああ、そういうコトね」

この街が位置づくガルージャ帝国は今、軍事的な成長期の只中にいる。皇帝の代替わりを契機に始まった周辺諸国への侵攻により、領土は日を追うごとに広がり続けている。強大な軍事力と莫大な資金に裏付けられた侵略行為。その饕餮な顎にかかり地図上から姿を消した小国は、この二十年で十を下ることはない。

その弛むことない侵攻を裏付けているのは、何万ともいえる軍勢だ。帝国を挙げて軍隊の強大化に力を入れている今、各地を預かる地方領主たちが独自に武人を集めていても不思議ではない。

目の前で無駄に武威を誇っている男たちにとって、広く武人を募っているこのような領主は有力な雇い主なのだろう。決まった主を持たず金に応じて雇い主と契約を交わすような傭兵を生業とする者も多いが、高給で雇われることを望む者も多いのだ。それになにより、武闘大会の優勝者という肩書きは、己の腕ひとつでのし上がっていかうという考え方の男たちにとっては、ひどく魅力的な条件なのだろう。

「ここの領主様ってよっぽど太っ腹なんだな」

「ああ、たいしたお方だよ。アシュービー様って言えば、傭兵稼業の

人間にとつちや有名だ。何しろ、抱えている軍隊が滅法強いからな

「へええ」

男は感心したように城のほうに視線を向けた。

「兄ちゃん、知らないか？ 先の戦争でだつて皇帝陛下から先陣を仰せつかった程のお方だよ。その時の功勞で、陛下から戦利品を賜つたこともあつたんだ」

「そりやすげえ。この前のつて、トラウイスが相手のやつ？」

男は、数年前に消滅した小国の名前を上げた。

「ああ、そつだ。小さいくせに滅法手強い相手だつたらしくてな。陛下と言えどもてこずつたと聞くよ。それでも、うちの領主様はちやんと先陣の務めを果たしたんだ」

「なるほど、その領主様が召し抱えてくれるんだ。皆が目の色変えるつてわけか」

納得したように頷いた男は、ふと子供のような笑みを浮かべて老人を見下ろした。

「なあおつちちゃん。優勝賞金つてき、いくら貰えんの？」

「おい、エジェル」

傍觀を決め込んでいたもう一人の男が低く唸つた。

「何だ兄ちゃん、参加しようつてのかい？」

老人の顔に、呆れたような表情が浮かんだ。エジェルと呼ばれた長髪の男は、背丈に比べて肉付きは薄い。つまりはひ弱そうに見えるのだ。

「だーいじょうぶ、俺こゝ見えても強いんだぜ？」

「そうは言つてもなあ」

旅人であればそれなりの体力は持ち合わせているだろうが、と、老人は言葉に詰まりながら傍らのもう一人の男に視線を向ける。そちらは武人といつても通用する程度には体格がいい。そつちの目那ならまだしも、という言葉は危うく飲み込んだ。

「いいじゃん。金額くらいさあ」

けれどエジェルは、無邪気に食い下がる。

「金五百だ」

「マジ？」

洩りきれず金額を告げると、案の定とも言おうか、エジェルの表情が色めきたつた。

金五百は、大金だ。一般的な個人商店の年間収入を軽く超える。慎ましく暮らせば、家族四人で十年は金に困ることはないだろう額だ。仕官の準備金という名目であるらしいが、それは誰にとつても強い誘惑を感じるだけの額面だつた。

「止めとけて、兄ちゃん。怪我して医者代が嵩むだけだぞ。兄ちゃんみたいに賞金に目がくらんで参加した奴が、今まで何人痛い目見てると思つてるんだ」

けれど、男の忠告は届かない。エジェルは笑顔を連れに向けた。

「なあ、参加しようぜ？」

「まったく——」

連れの男は深いため息をついてから、不安げに眉を下げている老人を見た。

「ご忠告感謝します。ですがこいつはその気になってますし……。まあ、痛い目見たら目も覚めるでしょう」

連れの男には本気で止める気がないらしい。その諦め混じりの口調から、若い男の無鉄砲さは今に始まったことではないらしい。

「心配すんなっておっちゃん。賞金が入ったら酒でもおこつてやるからさ」

老人の心配など気付きもしない風で、威勢のいい言葉を投げたエジェルは、そのまま人混みの中に紛れてしまった。

「あのバカ」

残った男が、苛立たしげに舌打ちする。

「会場も分らないのに——」

「あ、ああ、会場は城の前の中央広場だ。闘技場ができているし、人の流れについて行けばたどり着けるだろうけれど」

「ありがとうございます。すみませんが失礼します」

それでも、この雑踏の中では、本格的にはぐれてしまえば再会は困難だろう。男もそれに気付いたらしい。心なしか焦りを浮かべて礼を口にする、エジェルを追って人混みに消えていく。

残された老人は、わずかに知り合っただけの青年の身を案じるように、二人を飲み込んだ人波に視線を投げた。

だから、彼は知らなかった。

勢いよく人混みに紛れてしまったかに見えたエジェルが、すぐそこでもう一人を待っていたことを。そして、追いついたもう一人とひどく真剣なまなざしをかわし、頷きあったことを。

武闘大会出場者の控え室は、ごった返していた。

筋骨隆々たる体格を誇る男。背又を優に越える長剣を背負った男。誰も彼も、腕に自身があるという表情を浮かべ、対戦相手になるかもしれない周囲の人間に睨みを利かせている。

扉の向こうから人の声が近付き、室内の男たちの視線が一斉に動いた。鋭い視線は急ごしらえの扉に突き刺さり、室内には殺気さえもが満ちる。新たにやってくる挑戦者を威嚇する目的なのは明確だ。「だーから、絶対俺が勝つて。お前最近腰が痛いって口癖じゃん。年なんだから無理せず自學しとけって。賞金の分け前くらいはやるからさ」

賑やかなというより騒々しいというほうが相応しい声とともに、扉が開く。

「——お」

黒髪を腰近くまで伸ばした若い男が、双眸を見開く。上背がある割に肩幅は狭く、引き締まった手足の長さもあいまって、筋肉質で

あるのにひよろりとした印象を周囲に与えた。

視線を浴びた男が、数度瞬いてからくるりと扉の向こうを振り向いた。そこには案内してきた係員がいるはずだ。

「なあもしかして、武器って自分で用意しなきゃダメなわけ？ 何でもいいから貸してよ」

控え室の中から失笑が漏れる。同時に、複数の視線から殺気が消えた。

あからさまな殺気をぶつけても反応することなく、それどころか自前の武器さえ持っていない。祭りの雰囲気呑まれ調子に乗った若者の典型的な姿に、武人たちは本気で牽制する相手ではないと判断したらしい。

「おい、ヴァティ。お前も何か借りてこいよ」

言いながら、エジェルは部屋を後にした。

「目立ちすぎだ、馬鹿」

扉の外で煙草を吹かしていたヴァティは、あまりにも賑やかな声に眉根を寄せた。

「いいじゃん、これくらいの方がやりやすいつて」

肩を竦めてエジェルが応じる。けれどその表情は厳しく引き締まっている。どこまでも軽い口調とは裏腹に、眼差しは真剣だ。

「そうじゃない、先走りすぎだと言ってるんだ。打ち合わせもなく話を進めやがって……」

「だって、領主サマにお近づきになれる機会があるんだぜ？ 利用

しない手はないと思わねえ？ 普通に面会求めたって時間はつかりかかるじゃん。これで優勝できたら確実に顔が拝めるんだろ」

エジェルはやりと笑った。

「ヴァティだつてさ、そう思ったから乗ってくれたんじゃないの？」

「お前が突つ走るから仕方なく、だ。真止面から行ったら目立ちすぎるだろうが。領主の情報、まだほとんど手に入れてないんだぞ？」

「だから、優勝したらお近づきになれるつてば。優勝者の特権があれば意外と簡単に手に入るかもしれないぜ、情報」

ヴァティは大きくため息をついた。

「お前がどこまでも考えなしなのを忘れていた。顔を覚えられるのは本意じゃないんだぞ」

「あーもー、悪かつたつてば。これからはあなたの言うこと聞くつて。でも、今回は合わせてよ。乗りかかった船だしさ」

「仕方ない」

ヴァティは苦い表情で煙草を投げ捨てた。

「あ、どうせなら状況も読めない馬鹿な参加者の振りしてようぜ。そうそう負けるとは思ってないけど、油断してくれる方にはそっちの方がいいだろう？」

「馬鹿はお前だけで十分なんだがな……」

重ねてため息をついて、それでもヴァティは頷いてみせた。

係りの者に武器を借り、二人揃って控室の扉を開ける。その時  
見せた表情は、場違いな場所に迷い込んだ不安にさえ満ちていた。

試合は広場に設けられた円形の闘技場で行われる。擂鉢上に競り  
あがった周囲の観客席には、あふれんばかりの人々が詰め掛てい  
る。初戦の試合が始まり、会場は熱気に包まれていた。

歓声と声援と、時には野次が飛び交う円闘場の中央で、審判がぐ  
るりと周囲に視線を投げる。衆目が十分に集まったのを確かめてか  
ら、声を張り上げる。

「次の試合は、登録番号十八番のドラマア・ベレムと、登録番号五  
十三番のエジェル・アルディーバ！ 両者中央へ！」

分厚い鎧に身を包んだ武人と、あの借り物の槍を担いだ長身の青  
年とが円筒場に進み出る。新しい対戦に沸いた観衆の声が、一瞬の  
どよめきを経て失笑に変わった。

歴戦の強兵といった風情の相手に対し防具すら身につけていな  
いままのエジェルは、いかにもか弱そうに見えるのだ。

「運が悪かったな、ボウズ。怪我したくなけりゃさっさと降参しろ。  
自分の身の程を知るのも強くなる条件だよ」

鎧を鳴らした男が口ひげを蠢かせて笑った。  
対戦の組み合わせは、登録番号のくじ引きによる。完全な運によ

る組み合わせは、初回から優勝候補の潰しあいになる可能性もあれ  
ば、見るからに強そうな相手と祭りの熱気に煽られた素人との組み  
合わせになる場合もある。

今回の組み合わせは、観衆だけでなく鎧の男もそう感じたのだろ  
う。武威を誇るように背負っていた大剣を抜き取り、切っ先を地面  
に突き立てた。重い鉄の塊が地面を穿つ鈍い音が響く。一撃でも食  
らえば命はないだろう。

「そお？」

けれどエジェルはにやりと笑った。顔にかかる髪をかき上げ相手  
を見やる顔には恐怖の色はない。

「おっさんこそさっさと降参したら？ そんな重いモン振り回し  
て動けんの？」

それどころか、人を食った笑みのまま馬鹿にした言葉を吐いた。  
鎧の男の顔が朱に染まる。

「ほぎけ！」

大剣が土くれを跳ね上げて振りかぶられる。

「その言葉、後悔させてやる！」

「いいぜ、かかかってこいよ」

エジェルは笑って貧相な槍を構えた。

屈強な相手を前に怯む様子も見せない青年に、観客は興味半分の  
歓声を送る。それが、武人の怒気を一層煽った。

「死んでも文句は言うなよ」